

外来で医療情報を得るためにChatGPTを用いる回数が増している。
一番の理由は患者さんを前にしては、本を繙くより速いからだ。ただしその情報の正しさの判断は全て私自身に拠るため、日頃の勉強が欠かせない。

先日旅行中古刹で祈った際に、仏様含めて宗教がなべて人の幸せすべてを保証しないことに気付いた。そもそも最も悲しいはずの人の死を無くすことができる宗教は1つも無い。目の前の現実で心を集中することで、未知の「あの世」に心が惑わされないよう生きるか、死後の天国や浄土を想像することで死の恐怖を無くすよう促すか。

本人の前や横に仏様や神様がより沿って、各個人が自ら救われるよう見守って下さるという形だ。大切なのは必ず寄り沿ってくれるという安心感だろう。

これは患者さんと医療者との関係に少し似ている。

医学も宗教も、「目の前の苦しみをどう和らげるか」という点では共通している。

病気を治すことと、不安や痛みを和らげること、その両方がケアなのだから。医学的に治せる部分と言葉や寄り添うことで支える部分、その両方を大事にするのが人間らしいケアと言える。これは急性疾患だけでなく、高血圧や糖尿病といった慢性疾患にもあてはまる。時間軸を縮めれば死に近づくことは共通だから。

ただし特に治すことが難しい病気の場合、せめて孤独にさせないようにするとか、できることを一緒に探すとかに重心を置く、そういう方向性が大事だ。

無理に明るい事を話したり根拠のない希望を言う事は難しい。

「今の具合はどうですか？」とか「できることを1つずつ考えましょうか」のような寄り添う言葉が、十分力になることがあるはず。

完全な言葉をみつけられなくても、迷いながらも「見ているよ」「一緒に考えるよ」という姿勢が伝わればそれでよいのかもしれない。医療者は答えを出すというよりも、そばにいて一緒に考え続けるという姿勢が大事なのだろう。

今年のお盆の旅行中ふと「医療と宗教は似ている」と思い、ChatGPTと対話する中でこんな結論になった。ただ読書するより、プラトンやソクラテスが勧めたように、対話する事で考えが一段と深まるのだと実感した次第。

ただしそのためには西郷隆盛の「小さく叩けば小さく響く」「大きく叩けば大きく響く」のように、こちらがChatGPTを「大きく叩ける」よう、日々学び疑問を持つという習慣がとても大切だと思った。



色紙を使って手作り飾りを笹の葉に飾り付けをしました。七夕会には、皆様の心込めた願いを書いた短冊も飾られました。



ゆいまあるの夏祭りに学生さんが活気を運んで来てくれました。盆踊り、輪投げ、金魚すくい、射的を楽しまれた後にかき氷（いちご・レモン・グレープ味）、たこ焼きを皆様に召し上がられました。



ハーブでは、訪問診療・訪問看護・ケアマネジャー・デイサービス・認知症対応型共同生活介護を提供しており、多方面からご利用者をサポートしております。↓



発行元：医療法人ハーブ内科皮フ科
株式会社ハーブライフケア

所在地 知多郡阿久比町横松宮前 67
TEL 0569-49-2752/FAX 0569-49-2753